

トマス・アキナスにおける目的の原因性について

野邊晴陽¹

1. 問題の所在

トマス・アキナス(1224/25-1274)における目的 *finis* および目的因 *causa finalis* は、基本的にアリストテレスのそれを忠実に継承している。ただし、アリストテレスの中心的関心が観察の対象としての自然的世界にあった一方、アキナスの関心は神の被造物としての世界にあった。それゆえ目的論に関する考察の軸は、言わば運動や変化それ自体から、それらを基礎づける条件としての神に移動し、そうして摂理や恩寵の枠組みに取り込まれるとされる²。ところが、自然物の「目的」は内的で自律的な運動原理である一方、創造論的な世界観においては神という外的な「目的」に秩序づけられるから、その限りで個々の自律性は否定されるように見える。Barnes はこうした問題を指摘した上で、〈神は各々の内的原理を外から備え付けた〉という理解を提示した³。アキナスにおける目的論は、各被造物の運動の内的・個的な原理でありつつ、同時に神の創造の計画に基づくより外的で普遍的な秩序づけをも説明するのである⁴。

だが Pasnau は、特に後期中世の自然学においては、目的因を中心に据えるアリストテレス的な自然観はむしろ疑問視さえされていたと指摘する⁵。そもそもアリストテレスの *αἴτιον* とは、〈或る事物を知ることとはすなわち当の事物の *αἴτιον* を知る事だ〉とされるように⁶、言わば十全な理解のための「説明 *explanation*」だったとも言われるが⁷、その一方で後期中世の *causa* は、作出因をその典型とするような、結果に先行して存在し「結果を産出する能力をもつ」事物として理解されることになった⁸。ところで、こうした「作出因」ないし「先行する産出者」のモデルで目的因を理解しようとすると、

¹ 東京大学大学院総合文化研究科。nobe[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

² 恩寵や摂理の理論とアリストテレス的な目的論との関連を扱った研究として、Lang1990; McEvoy1992; Rosemann1996; Johnson2005; Oliver2013.

³ Barnes2014.

⁴ Oliver2013 では、万物が恩寵のもとにあるゆえに被造物は自律性をもたないとされているが、Barnes はこれに対して自然的な世界における被造物の自律性を擁護している。また Johnson2018 は目的因を主題とする数少ない研究の一つであり、(Oliver や Barnes とは逆の観点から) 個々の自律的な運動が宇宙全体の善性ないし一性に貢献しているという構造も明らかにしているが、検討の対象は認識をもつ被造物に偏っており、被造物全体に共通する目的論についてはさらなる検討が必要だと思われる。

⁵ Pasnau2011:100-1; 198-9; 557-9; Pasnau2020:90.

⁶ 『分析論後書』第1巻第14章(79a24)「何となれば、事物の根拠を観ることは事物を知ることにおける最も決定的な事柄だからである」; 『自然学』第2巻第3章(194b19)「われわれの専念しているのはただ知らんがために知ることであり、しかもこの知の対象の各々についてその『なにゆえに』を把握していないうちは、われわれはまだこの各々を知っているとは考えないのである……」。アリストテレス著作の訳文は旧岩波全集版によるが、表記を一部改めた。

⁷ Follon1988; Johnson2005:40-41.

⁸ Pasnau2011; Schmid2015. したがって、*causa* は本来のアリストテレスの *αἴτιον* とは別物になっていた可能性がある。Schmid と Pasnau は特に、ストアスにおける *causa* は結果に先行し結果を産出するものとして理解されていたと指摘している。目的因にまつわる思想の変遷については、Donough2020(同書に Pasnau2020、後述の Richardson2020 も収録)。また、アリストテレスの *αἴτιον* 自体もまた、このように理解ないし誤解されてきた経緯が

或る矛盾が生じる。というのは、目的とは本質的に結果として生じるものだから、「先行する産出者」ではありえないということである⁹。かくして、本来の αἴτιον からの逸脱が、特に目的因の位置づけに関する、いわゆる逆向き因果 backward causation の問題として顕在化するのである¹⁰。

ではアキナスにおいて目的因はどのように理解されているのだろうか。Pasnau も言及する通り、逆向き因果の問題にアキナスが触れるのは『神学大全(ST)』第 I-II 部第 1 問第 1 項の異論と反対異論である。原文を見てみよう。まずは異論である。

[T1] 原因 causa は本性的により先 prior のものである。しかし目的 finis は、その名称がそう響くように、「終極 ultimum」という性格をもつ。それゆえ目的は原因の性格をもたない¹¹。……

原文では、この論拠から人間が目的のために能動すると考えることが不合理であると主張される。まさに逆向き因果の矛盾を指摘する異論である。これに対する簡潔な回答の全文は次の通りである。

[T2] 目的は、実行 executio においては最後になるとはいえ、それでも能動者の志向 intentio においては最初になる。そして、そのようなしかたで〔目的は〕原因の性格をもつ¹²。

ここでアキナスは、「実行における目的」すなわち結果としての実在物と、「志向における目的」すなわち精神のうちに先取りされるものとを区別し、後者のみを原因として認めている。目的が原因だと言えるのは、行為者が実際の行為に先立って予め想定するものである限りにおいてだとすることで、逆向き因果の問題を回避しているのである。

だが、精神の内に先取りされる結果の観念こそが目的因だと考えるなら、神という知性が被造物世界を前もって観念しそれに基づいて創造を行ったと適切に説明できるであろうが、特に知性を持

ある。cf. Follon1988; Johnson2005.

⁹ Richardson によれば、アヴィセンナが既にこの(いわゆる逆向き因果 backward causation の)問題に言及し、生成や製作の結果として生じる実在物ではなく、むしろ生成や製作に先立って作出者の精神の内にあるものこそが目的因なのだと思えることで解決を図っている(Richardson2020. なおアヴィセンナ著作の該当箇所は VI *Metaphysics tract.* 14, n. 2; n. 27-32; I *Physics tract.* 2, n. 8; tract. 11, n. 1-2)。つまり、11世紀のイスラーム世界では αἴτιον を「先行する産出者」とするような理解が既に現れていたということである。また Pasnau の整理によれば、この逆向き因果の問題に関して、直接的ではないもののアヴェロエスがアヴィセンナを批判し、さらにオッカムがアヴェロエスを引き継いでいるという(Pasnau2020)。彼らは、前もって精神のうちにあるものは、むしろ作出だと主張するのである。アリストテレス自身が、精神の内の抽象的な結果物は目的因と呼べないと考えていたとする研究もあり(Bolton2015)、アヴェロエスとオッカムは、よりアリストテレスに忠実な「説明」としての目的因理解を保持しているように思われる。

¹⁰ Pasnau2020 では、アキナス『神学大全』とドゥンス・スコトゥスの『形而上学問題集』で同様の問題が同様に解決されていることを指摘し、上の註で言及したようなアヴィセンナの問題意識と解決法が中世ヨーロッパにも引き継がれていたとしている。ただしアリストテレス『自然学』への註解においてアキナスは、「原因を知って初めて或る事物を知ったことになる」旨を述べており、causa を「説明」とする理解ももっていたようである(In II *Phys.*, lect. 5)。これについては、本論(特に結論)でも扱う。

¹¹ ST I-II, 1.1, arg. 1: “Causa enim naturaliter prior est. Sed finis habet rationem ultimi, ut ipsum nomen sonat. Ergo finis non habet rationem causae.” 以下、アキナス原文の和訳は筆者による。

¹² ST I-II, 1.1, ad1: “finis, etsi sit postremus in executione, est tamen primus in intentione agentis. Et hoc modo habet rationem causae.”

たない事物は内的・自律的に目的因をもつことが不可能だということにもなりかねない。つまり、目的因を「先行する産出者」として理解するなら、その存在は精神内に限定されることになるが、そうすると自然物の生成変化の説明ないし理解という(本来の)役割を失ってしまうのである。とはいえ、周知の通り同問は人間の究極目的に関する考察なのだから、上の一節をもって、アクィナスの目的論を理解したことにはならないだろう¹³。それゆえ問題は、アクィナスにおける目的因が、個々の(とりわけ非知性的な)被造物の生成変化において「先行する産出者」としての原因の役割を果たしているのか否か、果たしているとするならどのようにか、という点である。

そこで以下で検討するのは、アクィナスにおける目的因が、認識を持つか持たざるかにかかわらないしかたで、つまりより一般的なしかたでどのように「先行する産出者」としての原因の機能を果たすのかという問題である。手順として、第一にアクィナスにおける「原因 *causa*」一般の性格を(「始まり *principium*」との比較を通じて)概観することで、アクィナスにおいて *causa* の基本的な理解が「先行する産出者」のそれであることを確認しておく。第二に他の諸原因、特に作用因との対比において目的因が果たす役割を検討し、それによってどのように「目的」が矛盾なく「先行する産出者」としての原因の機能を担っているのかを明らかにする。

2. アクィナスにおける「原因」

目的因の位置づけの検討に先立ち、まずは原因 *causa* 一般の理解を確認する。原因が「先立つ産出者」と理解されていたらしいことは上で見た通りだが、ここでは「始まり *principium*」との類似性に注目したい¹⁴。アクィナスは「原因」と「始まり」について、複数の著作で両者が非常に近い意味をもつ語であることに言及している¹⁵。先に、「始まり」という語の意味を確認しよう。端的な定義が『神

¹³ 確かにアクィナスにおいては、目的因や目的論は本来認識をもたない事物に属するものではなく、むしろ認識をもつものに関する考察、特に倫理学に属する主題として扱われることこそが適切であろう。というのも、目的のラチオ(およびそれに基づく善のラチオ)を認識するのは知的な被造物のみであり、したがって人間の行為において問題になるからである。実際にアクィナスは認識をもたない事物の目的因に関して、射手の喩えで有名な通り、基本的に認識をもつ事物によって「設定」されるものであることに基づき言及しているからである。だが他方で、認識の有無にかかわらず目的や志向が事物において機能することも認められている。例えば、*ST I-II*, q. 12, a. 5 は「志向が無理性的な動物にも適合するか」が主題である。射手の喩えに触れつつ、目的は動者 *movens* にこそ第一に属するから、動かされるものである無理性的動物には本来の意味では志向は属さない——但し生成や変化に或る終点がある限りでは志向が属すると言うこともできる——と論じている。ただし、そうした記述は、知的被造物と自然的被造物を対比して前者に本来の意味での目的や志向が属することを明らかにする文脈にあり、後者における目的や志向のあり方を詳らかにしてはいない。おそらくそうした事情から、志向 *intentio* に関する研究も、知性ないし知的存在者におけるそれが中心的主題である。Simonin1930; 坂田 1984; 坂田 1986; 坂田 1987; 坂田 1988; 藤本 1989; McEvoy1992; Jensen2009; Contreras&García-Huidobro2015; Pasnau2020。またアクィナスに関する辞典類で“*intentio*”を調べても、「自然学的な意味での志向」に関する記述は全く、もしくはほとんど無い。Schütz1895; Deferrari1985; Mondin2000:375。

¹⁴ 訳語としては「原理」「根源」の方が一般的かもしれないが、最も抽象的な訳語であり、また[T3]での定義を最もよく表す語として、ここでは「始まり」という訳語を用いる。

¹⁵ *DPN*, c. 3, n. 4: 『始まり』と『原因』は置換可能なかたちで言われる (*Licet autem principium et causa dicantur conuertibiliter, ut dicitur in V Methaphisice, tamen Aristotelis in libro Phisicorum ponit quatuor causas et tria principia. Causas autem accipit tam pro extrinsecis quam pro intrinsecis*)。; *ibid.*, c. 3, n. 5: 「場合によっては一方が他方として措定されることがある——例えば、全ての原因は『始まり』と呼ばれうるし、全ての始まりは『原因』と呼ばれうる (*tamen aliquando unum ponitur pro altero: omnis enim causa potest dici principium et omne principium causa*)。; *In V Met.*, lect. 1 (Marietti 751): 『始まり』と『原因』は、基体 *subiectum* としては同一であるが、一方で

学大全』に見いだされる¹⁶。

[T3] この「始まり」という名称は、何より「或る何ものかがそこから出発する *procedere* ところのもの」を意味表示する。というのは、「どのようなしかたであれそこから或る何ものかが出発するところのもの」を、我々は「始まり」と呼ぶということであり、またその逆も〔成り立つ〕¹⁷。

このテキストからは、「始まり」が「先立つもの」と理解されていることは明らかであろう。そしてアキナスは、こうした「始まり」の意味に対して、「原因」との共通性を認めつつ、両者の相違点についても言及している。例えば次の『「形而上学」註解 (*In Met.*)』の一節である。

[T4] この「始まり」という名称は「原因」〔という名称〕より共通的である。というのは、「始まり」ではあるが「原因」ではないようなものがあるということである¹⁸。

「始まり」と「原因」は、区別なく同じように使われる場合もあるとはいえ、厳密な意味においては「始まり」のほうがより共通的であり、全ての原因は始まりであるが全ての始まりが原因なのではない。すなわち、全て「始まり」だと呼ばれうる一方で、そうした諸々の始まりの一部のみが、さらに「原因」とも呼ばれるのである¹⁹。

さて、「原因」は「始まり」より限定的な意味をもつ語だということになるが、ではその限定性とほどのようなものなのだろうか。『自然の諸原理について (*DPN*)』では、次のように述べられている。

[T5] 或るものが黒性から白性へと動かされるとき、「黒いものがその運動の『始まり』である」と言われ、またそこから運動が存在することの始まるころのものは一般に「始まり」と呼ばれるが、他方で黒性は、そこから白性が存在することの帰結するころのものではない。しかし「原因」は、

概念 *ratio* としては異なっている (*Sciendum est autem, quod principium et causa licet sint idem subiecto, differunt tamen ratione*)。]

¹⁶ 以下、より端的な表現を引用するため複数の著作を横断するが、「原因」「始まり」「元素 *elementum*」を比較するいくつかのテキストで同じような内容が説明されている。

¹⁷ *ST I*, 33.1, co : “hoc nomen principium nihil aliud significat quam id a quo aliquid procedit, omne enim a quo aliquid procedit quocumque modo, dicimus esse principium; et e converso.”

¹⁸ *In V Met.*, lect. 1, n. 750: “hoc nomen Principium communius est quam Causa: aliquid enim est principium, quod non est causa; sicut principium motus dicitur terminus a quo.”

¹⁹ 他に次のような言及がある。*DPN*, c. 3, n. 5: 「場合によっては一方が他方として措定されることがある——すなわち、全ての原因は「始まり」と呼ばれうるし、全ての始まりは「原因」と呼ばれうる。しかしながら、「原因」は、共通的に言われる「始まり」に、〔何かを〕付加すると思われる。なぜなら、最初であるものは、後続のものが帰結するにせよ帰結しないにせよ、「始まり」と呼ばれうるからである——例えば職人はナイフの始まりだと言われるが、それはナイフの存在が彼の働きから出たためである (*tamen aliquando unum ponitur pro altero: omnis enim causa potest dici principium et omne principium causa. Sed tamen causa uidetur addere supra principium communiter dictum, quia id quod est primum, siue consequatur esse posterius siue non, potest dici principium sicut faber dicitur principium cutelli ut ex eius operatione est esse cutelli*)。] cf. *In I Phys.*, lect. 1, n. 5 ; *Contra errores graecorum*, pars 1, cap. 1: 「『原因』が『元素』より共通的であるように、『始まり』は『原因』より〔共通的である〕。というも点は、直線の始まり〔すなわち始点〕だとは言われるが、原因だとは〔言われない〕からである (*Sicut autem causa est communius quam elementum, ita et principium quam causa: dicitur enim punctum principium lineae, sed non causa*)。]」

そこから後続するものの存在が帰結するところの第一のものについてのみ言われる。それゆえ「原因」とは、その存在から他者が帰結するところのものだと言われる。そしてそれゆえ、そこから運動の存在することが始まる場所の第一のものは、「始まり」とは呼ばれるにしても、それ自体で「原因」とは呼ばれない²⁰。

このテキストから分かるのは、「原因」と呼ばれるものは、或る運動ないし変化の始点にあり、かつ後続するものの存在を帰結させるものを指していることである。つまりここでは、「存在 esse」をキーワードとして、他者の存在を帰結する点に「始まり」と「原因」の相違点が見いだされている。こうした「存在の帰結」に関しては、別のテキストでは「影響 influxum」や「依存 dependentia」という語で説明されている²¹。

[T6] 「始まり」と「原因」は、基体 *subiectum* としては同一だが、概念 *ratio* としては相違する。というのは、この「始まり」という名称は何らかの秩序 *ordo* を含意するのに対し、この「原因」という名称は、原因されるものの存在 *esse causati* に対する何らかの影響 *influxum* を含意するということである²²。

[T7] 他方で、「原因」は、自らの存在すること *esse* や生じること *fieri* に即して或るものがそれに依存する *dependere* ところのものを言う。それゆえ、事物の外側にあるもの、または事物の内側にあるがそれに基づいて事物が第一に構成されるわけではないところのものが「原因」と呼ばれるのであり、「要素 *elementum*」と[呼ばれるのでは]ない²³。

上の二つのテキストはいずれも類義語との相違点を説明するものである。そしてどちらのテキストでも、結果に当たるものの存在 *esse* に注目しつつ、それに関する影響や依存の関係を指摘している。また、具体的な内容は次のテキストからも明らかになる。主題は因果関係自体ではないが、「依存」という説明に注目されたい。

[T8] 一方が他方の原因であるというしかたで相互に関係しあうものは何であれ、原因の性格をもつ方のものは他方無しに存在 *esse* をもつことができるが、しかし置換はされない。ところで質料

²⁰ *DPN*, c. 3, n. 5: “sed quando aliquid mouetur de nigredine ad albedinem, dicitur quod nigrum est principium illius motus, et uniuersaliter omne id a quo incipit esse motus dicitur principium : tamen nigredo non est id ex quo consequatur esse albedo. Sed causa solum dicitur de illo primo ex quo consequitur esse posterioris : unde dicitur quod causa est ex cuius esse sequitur aliud ; et ideo illud primum a quo incipit esse motus non potest dici causa per se, etsi dicatur principium.”

²¹ *ST I*, 33.1; *In I Phys.*, lect. 1; *In V Met.*, lect. 1.

²² *In V Met.*, lect. 1, n. 751: “Sciendum est autem, quod principium et causa licet sint idem subiecto, differunt tamen ratione. Nam hoc nomen Principium ordinem quemdam importat ; hoc vero nomen Causa, importat influxum quemdam ad esse causati.”

²³ *In I Phys.*, lect. 1, n. 5: “causae autem dicuntur ex quibus aliqua dependent secundum suum esse vel fieri; unde etiam quae sunt extra rem, vel quae sunt in re ex quibus non componitur res primo, possunt dici causae, non tamen elementa.”

と形相の関係は、形相が質料に存在を与えるので、そうしたものとして見いだされる。そしてそれゆえ、質料が或る形相無しに存在することは不可能であるが、或る形相が質料無しに存在することは不可能ではない。すなわち、形相は、形相であるということにおいて、質料への依存 *dependentia* をもたないのである²⁴。

因果の関係にある二つのものに関して、原因に当たるものは他方なしに存在をもつことができるが、結果に当たるものは原因なしに存在をもつことはできない。こうした非対称的な関係が「依存をもたない」と言い換えられているのである。したがって、こうした「原因が無ければ結果の存在も無い」という関係性が、「始まり」と「原因」との相違点の要だと考えられる。

以上から、「始まり」との対比において明らかになった「原因」の特徴は次の通りである。「始まり」と「原因」は、共通的な意味概念をもち、ゆるやかな意味では置換可能であるが、厳密には後者の方が限定的な意味をもつ。すなわち、原因に当たるもの無しに結果が存在することはないというかたちで、結果の存在は原因に対する依存性をもつ。したがって「原因」とは、運動や変化の系列においてより先に存在しつつ、後続するものの存在がそれに依存するところのものである。この限りで、アキナスにおける「原因 *causa*」は、「先行する産出者」として理解されていると言えるだろう。さらに言えば、それは「先行しつつ存在を産出するもの」であり、また「それがなければ結果が存在しえないもの」である。

だが「原因」が「先行する存在産出者」であるなら、やはり逆向き因果の問題が生じることになる。それどころか、何かが存在することとは、それが現実態にあることに他ならないだろうから、厳密には「先行する存在産出者」は作用因以外のものではありえないことになってしまう。それゆえ次節では、「目的がどのようにして先行する存在産出者たりうるのか」という問題に取り組む。或る事物がその事物に生成したこと、あるいは変化したことにおいて、当の事物の存在は、目的にどのように依存していると言えるのだろうか。

3. 四つの原因の種類と目的因の役割

アキナスが挙げる諸原因の種類は、アリストテレスに従い四つである²⁵。まずは或る事物の生成における形相、質料の位置づけとそれらの原因性を、アリストテレス『自然学』の優れた要約と評される『自然の諸原理について』の論述に沿って、概観したい²⁶。

同書の冒頭でアキナスは、まず存在一般を可能態にあるそれと現実態にあるそれに区別し、前者を質料 *materia* と呼ぶ一方で、この質料に存在を与える(すなわち現実態における存在へと移行

²⁴ *DEE*, c. 4, n. 3: “Quecumque enim ita se habent ad inuicem quod unum est causa esse alterius, illud quod habet rationem cause potest habere esse sine altero, sed non conuertitur. Talis autem inuenitur habitudo materie et forme quod forma dat esse materie, et ideo impossibile est esse materiam sine aliqua forma; tamen non est impossibile esse aliquam formam sine materia, forma enim in eo quod est forma non habet dependentiam ad materiam.”

²⁵ *In I Phys.*, lect. 11, n. 82-97; lect. 13, n. 110-119; II, lect. 5, n. 176-186; lect. 10, n. 239-240; lect. 11, n. 245-247.

²⁶ 生成および消滅一般に関するより詳細な研究として Brower2014 (esp. c. 3-4)。ただし同研究は質料形相論を主題としているため、特に目的因について踏み込んだ言及は無い。

させたり、現実態における存在を保たせたりする)ものを形相 *forma* と呼んでいる。ここから、実体にせよ付帯性にせよ、或る形相の獲得への運動 *motus* すなわち可能態から現実態への移行が生成 *generatio* であり、その逆が消滅 *corruptio* であることが分かる。アクィナスは、生成を「非有から有への変化 *mutatio*」、消滅を「有から非有への変化」と表現している²⁷。但し、最初になされた区別は、存在と無ではなく、現実態の存在と可能態の存在であったので、ここでの非有はいわゆる「無」ではなく未だ現実態にはないところの可能的な有を指している。

[T9] また生成は、「存在しない *non esse*」ないし「非有 *non ens*」から「存在する *esse*」ないし「有 *ens*」への何らかの変化であり、他方で消滅は逆に「存在する」から「存在しない」への何らかの変化でなければならないのだから、いかなる「存在しない」からでも生成は生じるというわけではなく、むしろ可能態における有であるところの非有からこそ生成は生じるのである。例えば、像が銅から生じるが、この〔素材としての銅〕は、可能態において像なのであって、現実態においては像ではない²⁸。

アクィナスはここで、生成が特定の非有から生じることに注意を促している。すなわち生成は、いかなる可能的な有からでも生じるのではない。むしろ、或る事物 *P* が生成されるのは、常に特定の「*P* に対する可能有」からである。「有 *ens*」という語は、「存在するもの」一般を言うのではなく、「特定の何かであるもの」ないし「〈〇〇である〉と言われうるもの」を指していると理解されるのである(非有についても同様である)。したがって、或る事物 *P* の生成には、可能的に *P* であること(すなわち *P* でありうるという質料——言い換えれば現実的には *P* でないこと(すなわち *P* の欠如)——、および生成の結果として現実に *P* であることを保証するもの(すなわち *P* の形相)が必要になる²⁹。言い換えれば、「未だ *P* でないこと」が質料に、また「既に *P* であること」が形相に、それぞれ相当するのである。

以上から、質料が原因であることは疑いえないだろう。*P* の生成における質料は、積極的に存在の現実態性を生じさせるわけではないとはいえ、(他の *O* や *Q* や *R* のではなく) *P* の非有でなければならないのだから、「それ無しには *P* という特定の事物が存在しないし現実態化できないところのもの」である³⁰。他方で形相については、結果として生じるものである点で、そもそも「始まり」と呼べるのかさえ疑われてしまうかもしれない。だが、或る事物が *P* であるためには、当の事物が〈*P* である〉という形相を所有していなければならない。それゆえ、時間的な先行ではないが、本性的な先行性が形相には認められるだろう。また *P* の形相が当の事物を *P* たらしめる限りで、*P* の存在は(あるいはその「である存在」は)形相に依存しているとも言えるだろう。よって、質料と形相は確かに「原因」

²⁷ *DPN*, c. 1, n. 6.

²⁸ *DPN*, c. 1, n. 6: “Et quia generatio est quedam mutatio de non esse uel ente ad esse uel ens, e conuerso autem corruptio debet esse de esse ad non esse, non ex quolibet non esse fit generatio, sed ex non ente quod est ens in potentia : sicut ydolum ex cupro, quod ydolum est in potentia, non in actu.”

²⁹ *DPN*, c. 1, n. 5; c. 2, n. 1; c. 3, n. 1. cf. *In V Phys.*, lect. 2.

³⁰ 『自然の諸原理について』では、欠如 *privatio* も或る意味での生成の根源であることは認められている。ただし原因には数えられていない。

と呼ばれうる。

次に、生成における作用者と目的の位置づけについて見ていく。アキナスがまず指摘するのは、ものは自分自身で現実態に移行することはできず、既に現実態にある他者によって引き出されることで初めて現実態に移行する、ということである³¹。つまり、外的に作用するものが生成されるもの自体とは別に必要になるのである。こうして或る質料に対して外的に作用するもの(P')は「作用者 *efficiens*」「動者 *movens*」「能動者 *agens*」また「働きかけるもの *operans*」等と呼ばれる³²。さらに、このような作用ないし能動するものは、必ず何らかの目的をもっているとされる。『自然の諸原理について』では、次のように簡潔にまとめられている。

[T10] そして、アリストテレスが『形而上学』第2巻で述べている通り³³、能動する *agere* ところのもの全ては何かを志向する *intendere* ことによらなければ能動しないのだから、別の第四のもの、すなわち働きかける *operari* ものによって志向されるところのものがなければならない。そして、これは目的 *finis* と呼ばれる³⁴。

作用は一般に、何かを目指すことによってのみ作用するが³⁵、この目指される先が目的と呼ばれる。したがって、特定の事物 P の生成において、それを外側から促す事物 P' が志向しているものが「目的」と呼ばれることになる。事物 P が形相を獲得する前の段階で、作用者は既に目的を志向しているはずなので、作用自体の帰結(すなわち形相)に先立ち何らかのしかたで作用者は目的を捉えていることになる。『対異教徒大全』では、次のように説明されている。

[T11] 予め懐念している知性のうちに、結果の類似全体が存在している——知性認識者の能動を通じてこの[結果]に[能動者ないし知性認識者が]到達する——ように、自然本性的な能動者のうちにも結果の自然本性的な類似——これに基づいて能動はこれこれの結果に確定される——が予め存在している。例えば、火は火を生成し、またオリーブはオリーブを[生成する]のである³⁶。

ここで言われる「結果の類似」とは、能動の結果として現実にあられる何ものかではなく、知的なものにおいてはその何ものかの観念として予め想定されるものを指していると考えられる。知的でないものにおいては、最後の具体例からも分かる通り、作用者が作用自体に先立って目的として持っているものとは、当の作用者の形相であろう。したがって、特定の P の生成に対して、いかなるも

³¹ *DPN*, c. 3, n. 1; In VII *Phys.*, lect. 1-2, n. 885-896.

³² *DPN*, c. 3, n. 1: “Oportet ergo preter materiam et formam esse aliquod principium quod agat, et hoc dicitur esse efficiens, uel mouens, uel agens, uel unde est principium motus.”

³³ cf. In II *Met.*, lect. 4, n. 316-319; In V *Met.*, lect. 2, n. 771; 775.

³⁴ *DPN*, c. 3, n. 2: “Et quia, ut dicit Aristotelis in II *Methaphisice*, omne quod agit non agit nisi intendendo aliquid, oportet esse aliud quantum, id scilicet quod intenditur ab operante: et hoc dicitur finis.”

³⁵ III *SCG*, c. 1; 2; *ST I*, 44.4, co; I-II, 1.2; 109.6, co.

³⁶ III *SCG*, c. 2, n. 6: “Sicut autem in intellectu praeconciante existit tota similitudo effectus ad quem per actiones intelligentis pervenitur, ita in agente naturali praeexistit similitudo naturalis effectus, ex qua actio ad hunc effectum determinatur: nam ignis generat ignem, et oliva olivam.”

のでも作用者になれるわけではない。むしろ、可能的に P であるものが現実態における P に変化するためには、既に P の形相を所有し現実態において P であるところの特定の事物 P' によって働きかけられる必要がある。

以上から、作用者が「原因」と呼ばれることについても疑念の余地はないだろう。事物 P が現実態において存在するためには、作用者がその現実態性を外から与えなければならないからである。

だが、目的については不明瞭な点があると思われる。ここまで、生成や作用について考える際に、常に特定の事物 P の生成について、(O や Q ではなく) P の非有としての質料、P の形相、そして P の形相を既にもつ作用者に注目してきた。しかし、特定の形相をもつ作用者が与える現実態性は、当然その形相に即したものになるだろう。したがって、ここで「目的」と呼ばれるものは、作出者に還元され、固有の役割を果たしていないとも考えられるのではないか。言い換えれば、作出者は(それ自体も P の形相をもつので)特定の本質規定をともなった現実態性を与えるものとして機能するはずであるから、特定の目的をことさらに指摘しなくとも、P の生成は十分に説明されるように見えるのである。

では、現実態性を与える働きと区別される限りでの、目的の固有の役割とは何か。「万物が目的のゆえに能動すること」と題された『対異教徒大全』第3巻第2章では、次のように述べられている。

[T12] もし能動者 *agens* が或る確定された結果 *effectum* を目指していないなどとするなら、いかなる結果もその[能動者]にとって、無差異 *indifferens* だということになってしまうだろう。ところが、無差異に多数のものに関係するところのものは、それら[多数のもの]のうち他ではない或る一つを作用することはない。それゆえ、[外的な]何ものかを通じて或る一つ[の結果]に確定されでもしていなければ、何でも生じさせるものから或る[一つの]結果が帰結することはない。したがって能動する *agere* ことなどありえなかつただろう。したがって、能動者は全て、或る確定された結果を目指しているのでなければならない——この[確定された結果]が、その[能動の]目的だと言われるのである³⁷。

ここで「能動する *agere*」という動詞は、言わば無差異で無限定的な現実態化の働きそれ自体を指していると考えられる。というのも結果が「何であるか」が、目的の不在によって無差異になると述べられているからである。だが上で挙げた疑問は、そもそも或る能動が「無差異になる」などということは実際にはありえないのではないか、というものだった。では逆に、目的無き「無差異な能動」が想定されうるだろうか。それは、神に他ならない。次に引用する『神学大全』のテキストは、神の創造に関して、神が万物の目的因であることを論じる項の一節である。

[T13] 能動者 *agens* の全ては、目的のゆえに能動する。そうでないとしたなら、偶然によらなけ

³⁷ III SCG, c. 2, n. 8: “Si agens non tenderet ad aliquem effectum determinatum, omnes effectus essent ei indifferentes. Quod autem indifferenter se habet ad multa, non magis unum eorum operatur quam aliud : unde a contingente ad utrumque non sequitur aliquis effectus nisi per aliquid determinetur ad unum. Impossibile igitur esset quod ageret. Omne igitur agens tendit ad aliquem determinatum effectum, quod dicitur finis eius.”

れば能動者の能動 *actio* からあれではなくこれが帰結しないということになってしまうだろう。……ところで、能動し同時に受動するところのものもあるが、これは不完全な能動者である。そして、それら[不完全な能動者]には、能動することにおいても何かを達成することを志向する、ということが適合する。しかし単に能動者でしかない第一能動者には、或る目的の達成のために能動するということは適合せず、むしろ[第一能動者は]自らの完全性を、すなわちその善性を他に伝達するということを志向する。そして、各々の被造物は、神の完全性や善性の類似 *similitudo* であるところの自らの[個々の]完全性に到達することを志向する³⁸。

まずは簡潔な記述で、目的の役割が、能動者がもたらす帰結を特定のものに「確定する」ことであると明らかにされている。本稿でこれまで見てきたことから、生成変化は、「或る質料において或る形相が現実態化すること」と表現することもできるだろうが、この現実態化を、他ではない或る特定の形相の現実態化に方向づけるものが、目的と呼ばれているのである。言い換えれば、もしそうした方向づけの要素がなかったとしたら、言わばいかなる結果でも帰結されえてしまうということである。ここまでは、[T12]と同様である。

だが、それに続く、神の完全性と被造物の不完全性との対比による整理に注目せねばならない。能動しかせず受動しないものは、その意味で完全である。言い換えれば、何か達成すべきものをもつような未完成な状態にはない。逆に、受動もするものは、その意味で不完全であり、達成すべきものを(外的にも)つような未完成の状態にある。それゆえ実際に、被造物たる不完全な能動者は何か特定の事柄を目的としてもつ必要があるが、純粋な現実態かつ存在そのものである神は、達成すべき特定の目的無しに、言わばただ現実態にある(存在する)だけなのである。したがって、現実態化という働きは、純粋な現実態である神において体現される通りに、それ自体では必ずしも方向づけを伴う必要は無い。それゆえ被造物の生成における作出者についても、その現実態化の力それ自体と、現実態化の方向づけとは分けて考察されねばならない。作出者にあたる特定の事物 P' においては、現実態化の力それ自体とその方向づけの根源は、当の P' の存在 *esse* と本質 *essentia* のかたちで分かちがたく結びついているのではあるが、とはいえ生成の原因を考察する上では、両者は別のものとして観念されねばならないのである。

実際には、神以外の事物においては、すなわち我々が観察したり或る程度実感をもって想像したりできる範囲では、作出者と目的は実在する事物である作出者 P' の内に区別が難しいしかたで内在している。とはいえ、生成の過程を考察する上では、能動化・現実態化の受け手が質料である一方で形相がその現実態の何であるかを規定する要素だったように、その現実態化の源泉に加えて、現実態の規定の源泉も取り出される必要がある。かくして、「目的」は、被造物の世界のあり方を説明する上で、固有の役割をもっていると言えるだろう。ただし、それ自体は作用者の形相として

³⁸ ST I, 44.4, co: “omne agens agit propter finem: alioquin ex actione agentis non magis sequeretur hoc quam illud, nisi a casu. ... Sunt autem quaedam quae simul agunt et patiuntur, quae sunt agentia imperfecta : et his convenit quod etiam in agendo intendunt aliquid acquirere. Sed primo agenti, qui est agens tantum, non convenit agere propter acquisitionem alicuius finis ; sed intendit solum communicare suam perfectionem, quae est eius bonitas. Et unaquaeque creatura intendit consequi suam perfectionem, quae est similitudo perfectionis et bonitatis divinae.

作用者の内にあるので、作用自体に先立っていることになるのである。結果として生成される事物の「がある存在」の依存先として作用者があるとすれば、目的は生成される事物の「である存在」の依存先であり、そういったしかたで適切に「原因」の役割を果たしているのである。

4. 結論

最後に、これまでの論述から分かることをまとめつつ、目的の原因性について改めて示したい。第一に、目的因の性格として押さえておくべきことは、生成変化や現実化を「引き寄せる」ようなしかたで原因の役割を果たすわけではないということである³⁹。もちろん、例えば大学合格を目標に掲げて受験勉強に取り組むとき、大学合格という目的に対して、我々が自らそこに向かうと同時に、その目的の側から我々が惹きつけられているように感じられるかもしれない。だがこうした目的からの「引き寄せ」の感覚は、我々自身が或る事物に善のラチオを認め目的として欲求するという知的な働きに由来するのであって、生成変化や現実化の過程自体とは切り離して考えなければならない。目的因は、アクィナスにおいては、現実化を促すようなものではなく、終着点の設定、ないしそれへと敷設されたレールにすぎない。

第二に、アクィナスにおける目的因の意義は、問題になっている当の生成変化自体が「何(へ)の」生成変化なのかを規定する役割を果たす点にある。上で指摘した通り、形相因は生成変化の実際の(時間的な)最終形において何になつたかを示すものであり、その意味では生成変化の過程の最初から所有されているわけではない。質料に対し作用因が働きかけ初めたその瞬間からその生成変化が何の生成変化であるかを規定しているのはむしろ目的であり、その限りで諸々の原因を實在的に或る一つの生成変化にまとめる役割を果たしていると言えるだろう⁴⁰。「A が原因である」とは、「存在について A に依存する」「A なしには存在できない」ということだったが、神を除けば、事物が何らの規定も無しに現実化することはありえないのだから、生成変化の最も根本的な規定が目的因による規定なのであり、被造世界においては目的因無しには生成の全体が成立しえない。言い換えれば、現実態においてあることに対して形相という規定要素が必要なのと並んで、現実態になることに対しても、目的というかたちで規定要素が必要なのである。

第三に、「存在における依存」に関して、目的因が保証している「存在」はいわゆる「である存在」だということが明らかである。「がある存在」ないし現実態性を与えるのは作用因であり、目的因は生成変化の過程において(そして形相因が生成変化の最終形において)「何であるか」ないし「何になるか」を規定しているのである。かくして目的因は、生成における役割に関して形相因に近いものがある。実際にアクィナスのテキストからは、以上のような形相因と目的因の役割の「近さ」を読み取ることができる。

³⁹ 実際にアリストテレスは『生成消滅論』第1巻第7章(324b13-19)で、目的因が「作用する性質をもたない」と明言している(同箇所へのアクィナスの註解は残念ながら残されていないが、アリストテレスの記述の理解自体については Bolton2015 参照)。アクィナスにおける目的因の理解が、思想的には転換点にあることは予想されるが、実際にどのように位置づけられるのかについては、ここでは今後の課題として指摘するにとどめたい。

⁴⁰ 目的因は、「作出因を作出因たらしめる」「諸原因の原因性の原因だ」と表現される。In *V Met.*, lect. 2, n. 775.

[T14] 他方で「原因」[という語]によるなら、形相因ないし目的因を知性認識する。諸事物は自らの存在すること・生じることの限りでは最大限にこれら[形相因ないし目的因]に依存するのである⁴¹。

ここでの「諸事物」も、神を除く被造物と読むべきだろう。生成の過程の終着点は或る形相の現実態化である。というのも、「いかなる事物も自らの自然本性的な形相に対して次のような関係をもつ——当の[自然本性的な形相]をもっていないときにはそれに向かい、また当の[自然本性的な形相]をもっているときにはそれにおいて休らう⁴²」からである。したがって、生成の完了に際して、目的因に当たるものは形相因と一致し⁴³、あるいはそれによって姿を消すのである。

かくして、目的因に当たるものは生成変化の最初の段階から「である存在」の規定という仕方で当の生成変化に関わり、かつそれ無しには生成変化が或る特定の帰結をもたらさないのだから、「原因」の性格をもっていると言うことができる。すなわち目的因は、自然物においても、矛盾なく「先行する産出者」としての原因たりうるのである。また、先行する産出者として或る事物の存在に貢献しているのであれば、その十全な理解にも必須の要素となるだろう。というのも、当の事物がどのようにして当の事物自体の「である存在」を得るに至ったのかを説明するのが目的因だからである。ただしそれは、形相ないし本性の理解の背景に退き、あるいはそれに同化してしまっている(少なくともそう理解される可能性がある)。その意味では、アクィナス自然学における目的因は重要性を失いつつあると言えるかもしれない。とはいえこの点は、言い換えれば、「である存在」を担う目的因との対照によって、「がある存在」を担うものとしての作出因の役割をより鮮明に浮き彫りにしている、と言うこともできるだろう。本稿冒頭の[T2]で見た通り⁴⁴、アクィナスは「実行における目的」と「志向における目的」とを区別し、後者にのみ原因性を認めていたのであった。さしあたり、前者が「実際の生成の過程の終点」を意味するのであればそれは形相に他ならないので、確かに目的因としての原因性はもたないことになる。他方で、後者は生成に先立って生成のあり方を規定する限りで、原因の役割を果たしているのである⁴⁵。

⁴¹ In I *Phys.*, lect. 1, n. 5: “per causas autem videtur intelligere causas formales et finales, a quibus maxime dependent res secundum suum esse et fieri”

⁴² ST I, 19.1, co.: “Quaelibet autem res ad suam formam naturalem hanc habet habitudinem, ut quando non habet ipsam, tendat in eam; et quando habet ipsam, quiescat in ea.”

⁴³ その意味で目的因と形相因は一致し、能動者と受動者の志向するものが同一だと言うことができる。I, 44.4, co; In III *Phys.*, lect. 4, n. 7-11.

⁴⁴ ST I-II, 1.1, ad1.

⁴⁵ とはいえ、同時に、[T2]では主に人間の知性における「志向」が想定されていた。では、この「志向における目的」のみを原因と認める定式は、認識をもたない事物における目的因にも適用可能なのだろうか。アクィナスが「自然本性的な能動者のうちにも結果の自然本性的な類似が予め存在している」と述べていること、またこうした「類似」は当の能動者がもつ形相だと考えられることについては、既に触れた(第3節[T11])。だが、当の能動者の形相は、既に現実態にある限りで目的となることはできない。したがって、或る事物の形相がどのようにして当の事物の能動 actio の目的たりうるのか、自然的な能動者は厳密には何を志向しているのかが問題となるだろう。またそのためには、「形相」「本性」「傾向 *inclinatio*」「完成 *perfectio*」といった用語の整理が必要となるだろう。cf. Blanchette1992; Rosemann1996; Wippel2007, c. VI.

謝辞 本稿の作成にあたって、山本芳久氏、千葉将希氏、上遠野翔氏には草稿を読んでいただき、非常に有益なコメントをいただいた。本稿には取り入れられなかった点もあるが、特に記して感謝する次第である。

参考文献

- Aertsen, J.A., *Nature and Creature: Thomas Aquinas's way of Thought*, Leiden: E.J. Brill, 1988.
- Barnes, Corey L., "Natural Final Causality and Providence in Aquinas," *New Blackfriars* 95 (1057), 2014, pp. 349-361.
- Beebe, H., Hitchcock, C. & Menzies, P. (eds.), *Oxford Handbook of Causation*, Oxford: Oxford University Press, 2012.
- Berends, Bill, "Proverbs and the Case for Teleological Ethics," *Vox Reformata* 79, 2014, pp. 50-66.
- Binswanger, Harry, "Life-Based Teleology and the Foundations of Ethics," *The Monist* 75 (1), 1992, pp. 84-103.
- Blanchette, Oliva, *The Perfection of the Universe in Aquinas : A Teleological Cosmology*, University Park: Pennsylvania State University Press, 1992.
- Bolton, Robert, "The Origins of Aristotle's Natural Teleology in Physics II," in: Mariska Leunissen (ed.), *Aristotle's Physics. A Critical Guide*, Cambridge: Cambridge University Press, 2015, 121-143.
- Brower, J., *Aquinas's Ontology of the Material World. Change, Hylomorphism, and Material Objects*, Oxford: Oxford University Press, 2014.
- Charles, David., "Teleological Causation," in: Shields, C.J. (ed.), *Oxford Handbook of Aristotle*, Oxford: Oxford UP, 2012.
- Colvert, Gavin T., "Back to Nature: Aquinas and Ethical Naturalism," *Lyceum* 8 (2), 2007.
- Contreras, Sebastián, & García-Huidobro, Joaquín, "Teleology, Natural Desire and Knowledge of God in the Summa Contra Gentiles," *Imago Temporis. Medium Aevum* 9, 2015, pp. 265-286.
- Cunningham, Sean N., "In Defense of Law: The Common-Sense Jurisprudence of Aquinas," *Liberty University Law Review* 1 (1), 2006, pp. 73-110.
- Deferrari, Roy J., Barry, M. Inviolata, McGuinness, Ignatius, *A Lexicon of Saint Thomas Aquinas Based on the Summa Theologica and Selected Passages of His Other Works*, Kyoto: Rinsen Book co., 1985.
- Dewan, Lawrence, "St. Thomas, Metaphysical Procedure, and the Formal Cause," *New Scholasticism* 63, 1989, pp. 173-182.
- Follon, Jacques, "Réflexions sur la théorie aristotélicienne des quatre causes," *Revue Philosophique de Louvain* 86 (71), 1988, pp. 317-53.
- Hayden, Mary, "Rediscovering Eudaimonic Teleology," *Monist* 75 (1), 1992, pp. 71-83.
- Hütter, Reinhard, "To be good is to do the truth: Being, truth, the good, and the primordial conscience in a thomist perspective," *Nova et Vetera* 15 (1), 2017, pp. 53-73.
- Jensen, Steven J., "The Role of Teleology in the Moral Species," *Review of Metaphysics* 63 (1), 2009, pp. 3-27.

- Johnson, J. “Final Causality in the Thought of Thomas Aquinas,” Purdue University, 2018 (diss.).
- Johnson, M.R., *Aristotle on Teleology*, Oxford: Clarendon Press, 2005.
- Lang, Helen, “Aristotle's Physics: Teleological Method and Its Medieval Half-Life,” in: *Knowledge and the sciences in Medieval Philosophy: Proceedings of the Eighth International Congress of Medieval Philosophy*, vol. 3, R. Tyorinoja, A.I. Lehtinen & D. Follesdal (eds.), Annals of the Finnis Society for Missology and Ecumenics, 1990, pp. 103-110.
- Long, Stephen A., *The Teleological Grammar of the Moral Act*, Sapientia Press of Ave Maria University, 2015.
- McDonough, Jeffrey K. (ed.), *Teleology: A History*, New York: Oxford University Press, 2020.
- McEvoy, James, “«Finis est causa causarum»: le primat de ja cause finale chez S. Thomas,” in: Jacques Follon & James J. McEvoy (eds.), *Finalité et intentionnalité: doctrine thomiste et perspectives modernes : actes du colloque de Louvain-la-Neuve et Louvain, 21-23 mai 1990*, Louvain-la-Neuve: Éditions de l'institut supérieur de philosophie/Paris: Librairie philosophique J.Vrin/Leuven: Éditions Peeters, 1992, pp. 93-111.
- Mondin, Battista, *Dizionario enciclopedico del pensiero di San Tommaso d'Aquino* (Seconda edizione riveduta e corretta), Bologna: Edizioni Studio Domenicano, 2000.
- Oliver, Simon, “Aquinas and Aristotle's Teleology,” *Nova et Vetera*, 11 (3), 2013, pp. 849-70.
- Pasnau, Robert, *Metaphysical Themes, 1274-1671*, Oxford-New York: Clarendon Press, 2011.
- , “Teleology in the Later Middle Ages,” in: *Teleology: A History*, Jeffrey K. Donough (ed.), New York: Oxford University Press, 2020, pp. 90-115.
- Perler, Dominik, “Intentionality and Final Causes,” in: Dominik Perler (ed), *Ancient and Medieval Theories of Intentionality*, Brill, 2012, pp. 301-323.
- Perlman, L. “The Modern Philosophical Resurrection of Teleology,” *Monist* 87 (1), pp. 3-51.
- Richardson, Kara, “Avicenna on Teleology: Final Causation and Goodness,” in: *Teleology: A History*, Jeffrey K. Donough (ed.), New York: Oxford University Press, 2020, pp. 71-89.
- Rosemann, P. *Omne Agens Agit Sibi Simile: A 'repetition' of scholastic metaphysics*, Leuven: Leuven University Press, 1996.
- Schmid, Stephan, “Teleology and the Dispositional Theory of Causation in Thomas Aquinas,” in: Dominik Perler & Stephan Schmid (eds), *Final Causes and Teleological Explanation. Logical Analysis and History of Philosophy* 14, Leiden: E.J. Brill, 2011, pp. 21-39.
- , “Finality without Final Causes? Suárez's Account of Natural Teleology,” *Ergo* 2, 2015, pp. 395-425.
- Schütz, Ludwig, *Thomas Lexikon*, 3. Auflage von Enrique Alarcón vorbereitet, Universität von Navarra, 2006 (URL: <https://www.corpusthomicum.org/tl.html>).
- Seggiaro, Claudia Marisa, “Generación y causalidad en Física I.7 y II.3,” *Synthesis* 26 (1), 2019.

- Simonin, H.D., “La notion d’ ‘Intentio’ dans l’œuvre de S. Thomas d’Aquin,” *Revue des Sciences Philosophiques et Theologiques* 19, 1930, 445-63.
- Torrell, Jean-Pierre, *Initiation à saint Thomas d’Aquin. Sa personne et son œuvre*, Paris: Les Édition du Cerf, 4^e édition, 2015.
- White, Thomas Joseph, “Imperfect Happiness and the Final End of Man: Thomas Aquinas and the Paradigm of Nature-Grace Orthodoxy,” *The Thomist* 78 (2), 2014, pp. 247-289.
- Wippel, John F., “Thomas Aquinas on Creatures as Causes of Esse,” *International Philosophical Quarterly* 40, 2000, pp. 197-213.
- , “Thomas Aquinas on Our Knowledge of God and the Axiom that Every Agent Produces Something Like Itself,” in: *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas II*, Studies in Philosophy and the History of Philosophy vol. 47, Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 2007, pp. 152-171.
- 坂田登「《ens diminutum》としての《intentio》について」『中世哲学研究』第 3 号、1984 年、58-65 頁。
- 「トマス・アキナスにおける《intentio》の意味——Simonin の研究に基づいて」『中世哲学研究』第 5 号、1986 年、58-61 頁。
- 「《intentio》としての《verbum》と精神の《intentionalis》なはたらきについて」『中世哲学研究』第 6 号、1987 年、42-48 頁。
- 「《actus mentis》としての《intentio》について」『中世哲学研究』第 7 号、1988 年、65-69 頁。
- 長倉久子「自然の形而上学的分析から言語の分析へ——エッセと日本語(2-2)」『アカデミア 人文・社会科学編』第 81 号、2005 年、1-38 頁(再録:『トマス・アキナスのエッセ研究』知泉書館、2009 年、155-188 頁)。
- 藤本温「トマス倫理学における目的概念について」『中世哲学研究』第 8 号、1989 年、46-50 頁。
- 山田晶「トマス・アキナスにおける《causa rerum》について」『哲学研究』第 46 号、1977 年、293-326 頁。